

階上テラス型園庭という保育環境が 子どもの育ちに及ぼす影響

—幼児の身体活動量調査の結果から—

幸喜 健（初等教育学科）

The Influence of Terrace-type Playgrounds in Nursery School Environments on Children's Development: Results from a Survey of Physical Activity Level in Young Children

Ken Koki

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

Abstract

In this study I investigated the physical activity of 4-year-old children attending two nursery schools in Yokohama, Kanagawa Prefecture (Nursery A, with an earthy playground, and Nursery B, with a terrace-type playground on the roof) and observed their activities during nursery school hours. The children were fitted with activity meters to measure the number of steps taken, distance walked, and calories burned while at the nursery school, and the results were analyzed for comparison. The results showed that there were no significant differences between the two nursery schools. These results suggest that the terrace-type playground at Nursery B functions well as an alternative environment to the earthy playground, and that the organization of the daily program and the content of the activities have a certain degree of influence on the children's physical activity level.

Key words : nursery school, terrace-type playground, nursery environment, physical activity level of young children, children's development

キーワード：保育所、階上テラス型園庭、保育環境、幼児の身体活動量、子どもの育ち

I. 緒言

乳幼児期は生涯にわたる心身の発達の基礎となる重要な時期である。そのため、保育所では乳幼児の発達を保障するために、戸外でのびのびと活動するのに十分な環境を整えることが求められ

る。しかしながら、近年では首都圏や大都市部を中心として待機児童問題が社会的な課題となっており、それを解消するために多種多様な形態の保育所が設置されるようになってきている。こうした中には設置認可の際に自治体独自の規制緩和措置を受け、従来型の土の園庭とは異なる階上テラ

ス型園庭を備えた施設や園庭を持たず近隣の公園を園庭の代替として活用している保育施設も増えており、おのずと子どもたちが屋外において十分に身体を動かすことや自然物と触れ合う機会が減ずることも考えられる。今後、保育現場において子どもの健やかな育ちを保障していく上で新たな問題が生じることも予想される。

筆者らは、これまでも階上テラス型園庭を持つ保育所を対象として研究を行っており、子どもの遊びの観察からテラス型園庭の物理的環境が遊びに及ぼす影響として土の園庭に比べて「自然」「感覚遊び」「役割のあるごっこ遊び」が有意に少なく、「自然環境が少ない」「遊びの拠点となる場がづくりにくい」「環境を構成する上で移動遊具が多用される」といった特徴があること（細川・幸喜・岡野・早川・堂山、2019）や保育環境に関する園長へのインタビュー調査によって「自然とのかかわり」が乏しかったり階下への落下を防止するため「遊具を使用した遊び」に制約が課されていたりすることで園児の遊び体験について課題意識を持っていること（幸喜・細川・岡野・早川、2021）などを明らかにしてきた。

こうした園庭環境が異なることによる従来との差異や課題は現場保育者も意識するところであろう。早川（2017）は認可保育所に勤務する保育士700名弱に園庭環境に関するアンケート調査を実施しており、保育者が園庭に期待することの筆頭として8割の者が「戸外で体を十分に動かし、健康増進を図る」ことを挙げているが、その中でも「一般的な土のある園庭」を有する園に勤務する者（91%が同項目を選択）と「園庭はなく、園庭に代わるテラスがある」園に勤務する者（76%が同項目を選択）とで園庭に対する期待度に差があることを指摘している。

本研究では、階上テラス型園庭が「戸外で体を十分に動かし、健康増進を図る」のに従来型の土の園庭と比較して遜色があるのか、それらを有する保育所で生活する子どもの身体活動量の調査を行い、その比較・検討を通して実証的に明らかにしたい。また、新たな形態であるテラス型園庭を有する園の保育に関する実態把握（デイリープロ

グラムなど）を進め、園や保育者が子どもの育ちを保障するためにどのような工夫や取り組みをしているのかについて明らかにしたい。

Ⅱ. 方法

（1）調査対象

神奈川県横浜市にあるいずれも社会福祉法人立の認可保育所であるA保育園（接地性があり従来型の土の園庭を有する、以下A園と表記）とB保育園（建物の4・5階に設置され、接地性がなく階上テラス型の園庭を有する、以下B園と表記）の2園に在園する4歳児クラスの幼児を対象として調査を実施した。

（2）調査期間

2016年12月、各園で園外活動を伴う行事等の特別な設定がなされていない平日でそれぞれ2日間ずつ調査を実施した。

（3）調査内容

上記対象に活動量計（テルモ製、型番：MT-KT01、検出方法：3軸加速度計センサー）を装着し、園児が在園する時間（概ね8時から17時までの時間帯で、午睡時を除く）における歩数、歩行距離、消費カロリーを測定した。

調査の実施にあたっては事前に書面を配布して保護者に調査内容の趣旨と結果の取り扱いについて説明を行い、保護者から調査協力の同意書の提出が得られた家庭の園児のみに実施した。さらに調査当日に活動量計について園児に実物を見せ、実際に装着を試行した後に園児本人から同意を得た上でおこなった。

また、これらを測定する間、それぞれの園における屋外での活動時間を計測するとともに、クラスの1日の生活の流れと園児の活動の様子を観察し、記録紙に書き留めた。

(4) 分析方法

A園とB園の調査で得られた測定結果を比較し、統計的手法を用いて分析をおこなった。分析の際には体調不良による早退など測定結果が不十分であると判断したデータは除外し、調査2日間で得られたA園12名・B園14名分のデータを分析の対象とした。

Ⅲ. 結果と考察

A園における園庭・園外での活動時間は2日間平均で午前0.63時間、午後0.86時間となり計1.49時間であったのに対し、B園におけるテラスでの活動時間は午前1.73時間、午後1.13時間で計2.86時間であり、ほぼ2倍となった。^{注1} A園では毎朝ホールで4・5歳合同の集いがあり、登園後それまでの時間は自由遊びが室内に設定されていたことも戸外で活動する時間が少なかった要因として挙げられる。

それぞれの園における園児の在園時間中の歩数をまとめると次の図1・2のようになった。それぞれ単位時間(分)あたりの歩数の平均値の差が統計的に有意かを確かめるために、MS-Excelを用いて有意水準5%で両側検定の t 検定をおこなったところ、歩数については $t(21) = -1.77$, $p = .09$ であり、有意差は見られなかった。歩行距離と消費カロリーの比較においても同様の結果となった(それぞれ $t(21) = -0.81$, $p = .42$ 、 $t(21) = -0.52$, $p = .61$)。歩行距離と消費カロリーについては図の掲載を割愛する。

保育環境としては、A園は平屋建ての構造で園

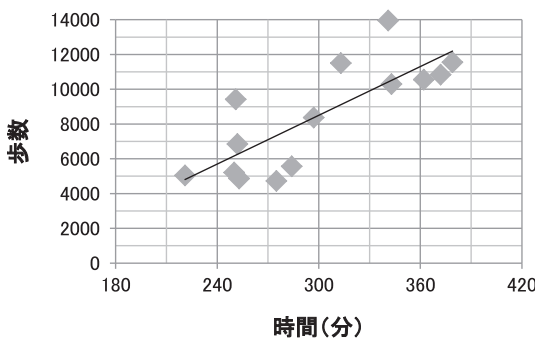


図1. A園園児の在園時間と歩数の関係

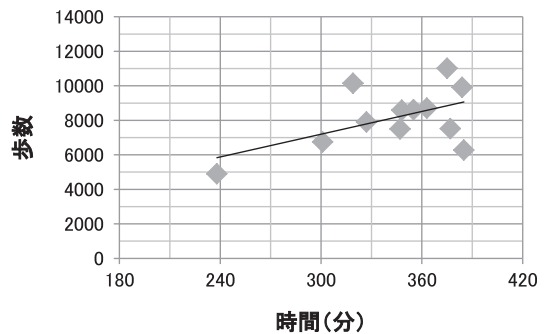


図2. B園園児の在園時間と歩数の関係

舎に沿って園庭が存在し、各年齢児クラスの保育室から園庭への出入りが比較的容易である(図3)。また、園周辺は住宅地や農地が主であり、自動車の往来も比較的少ないことから近隣の公園(図4)への散歩やそこでの運動遊びも行っている(観察した2日間の内、1日は散歩で公園まで外出した)。

B園は5階建てビルディングの4・5階部分を占有し、5階の一部がテラスになっている(図5)。建物は交通量の多い2本の幹線道路に挟ま



図3. A園の土の園庭



図4. A園近隣の公園



図5. B園のテラス型園庭

れ、散歩に出かけることが困難な状態であり、戸外での活動はテラスが中心となっている。

環境にはこうした違いは存在するものの、調査結果に差が見られなかったことから、子どもの身体活動量の面に関してはB園においてテラス型園庭が従来の土の園庭の代替的な環境として十分に機能していることが窺われる。

この背景としては、B園の園長から「限定された保育環境だからこそ、子どもたちが主体的に過ごす自由遊びの時間をできるだけ多くとるようにデイリープログラムを組み立てている」という話が聞かれたようにB園のデイリープログラムが自由遊びを中心として組み立てられている(図6)ことや、布団敷きや掃除の時間に廊下の端から端まで雑巾がけをおこなうなど意図的に子どもの身体活動量を増やすような取り組みが園全体でなされていることが挙げられる。

また、保育者の働きかけについてもB園においては朝登園して身支度を済ませた子からテラス

へ出るように促しており、子どもたちもそれが自然な様子で過ごしていた。外遊びの際にも見守り中心のA園と比してB園では保育者が積極的に子どもたちの輪の中に入って一緒に遊ぶ姿や、手つなぎ鬼や花いちもんめといった動きのある遊びを子どもたちに提案する姿も見受けられた。A園では遊具や自然物が子どもの身近にあり、そこまで積極的に介入せずとも子どもが自然と没入できる遊びを見つけやすいといったこともそうした違いに現われているものと考えられる。B園は階上テラスという限定された環境で、遊具(ボールや砂など)の使用に制限が設けられたり、自然物との関わりから遊びが生まれたりしづらかったりする中で、こうした環境の違いを踏まえつつ、子どもたちの身体活動を保障して健康増進を図っていかうとする園の方針や保育者の意識が一定程度の寄与をしていることが考えられる。

Ⅳ. 総合的考察

B園のように従来型の土の園庭がなく、積極的に園外活動を実施することも困難な限定的な環境だからこそ保育現場において子どもの身体活動量の多寡への危機意識が芽生え、保育の取り組みに反映されているのではないかと。現場の保育者が自園の園庭環境をどのように捉えているのか、また外遊びをどのように意識しているかによって活動内容が決められ、身体活動量の多寡に影響を及ぼすと考えると保育者の意識に関しても検討をおこ

		天候	8:00	15分	30分	45分	10:00	15分	30分	45分	11:00	15分	30分	45分	12:00	14:30	15:00	15分	30分	45分	屋外での自由遊び時間計					
A園	1日目	晴れ	自由遊び(室内)				休憩10分	自由遊び(園庭)30分				午睡				自由遊び(園庭)55分				85分						
	2日目	曇りのち晴れ	自由遊び(室内)				休憩9分	散歩8分	自由遊び(公園)26分				散歩9分	午睡				自由遊び(園庭)48分				76分				
B園	1日目	曇り時々小雨	自由遊び(テラス)90分				自由遊び(室内)				布団敷き	午睡				雑巾がけ	自由遊び(室内)				自由遊び(テラス)80分				150分	
	2日目	晴れ	雑巾がけ	自由遊び(テラス)75分				自由遊び(テラス)43分				布団敷き	午睡				雑巾がけ	自由遊び(テラス)75分				193分				

図6. 各園の1日の生活の流れ(調査時)

なう余地がある。

また、各園で単位時間当たりの身体活動量に差が見られなかったことから、子どもの身体活動量を増やすためには在園時間中に運動する時間（自由遊びの時間）をいかに確保するかが肝要であることがわかる。適切な身体活動量については運動能力テストなどを実施することで検討することも可能であると考えが、「量」そのもののみならず外遊びの内容の違いにより子どもが得られる経験も異なるため、動的な遊びの「質」に対する視点も今後の調査・研究では追求していく必要も感じられた。

今後、土の園庭もなく代替となるテラス型園庭もない近隣の公園を園庭の代替としている保育施設での取り組みなどの調査もおこない、従来の保育所とは異なる土の園庭がない保育施設における保育の在り方を模索していくための一助としたい。

注

- 1) 野中 (2014) の公立保育所120園を対象とした調査によると4歳児クラスの園庭・園外における外遊びの実施時間の平均は午前1.41時間、午後1.76時間となり計3.17時間であった。野中の調査は質問紙によるもので実測したものでなく、また今回の2園における調査は8時から17時までと時間帯を限定したものではあったが、B園の方がこの平均値に近かった。

引用文献

- 幸喜健・細川かおり・岡野雅子・早川悦子(2021) 保育所における階上テラス型園庭の使用方の実態と管理運営上の課題。鎌倉女子大学紀要, 28, 25-34.
- 野中壽子(2014)外遊びの保育環境に関する研究。名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 22, 75-81.
- 早川悦子 (2017) 保育所における園庭が果たす役割—保育士への調査から—。鶴見大学紀要, 第3部, 保育・歯科衛生編, 54, 73-78.

細川かおり・幸喜健・岡野雅子・早川悦子・堂山亜紀 (2019) 接地性のないテラス型園庭という環境が子どもの遊びに及ぼす影響。千葉大学教育学部研究紀要, 67, 191-197.

謝辞

ご多用の中、本研究にご協力くださいました保育所の関係各位に心より御礼申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費助成事業を受けたものである。研究科題名「園庭がない保育所における保育に関する研究：待機児童解消と子どもの発達保障の両立」(研究代表者：細川かおり, 研究種目：基盤研究 (C) (一般), 研究期間：2015-2017年度, 科研費研究課題番号：15 K 01769)

要旨

本研究では神奈川県横浜市にある2つの認可保育所 (A 保育園：接地性があり土の園庭がある、B 保育園：接地性がなく階上にテラス型の園庭がある) に在園する4歳児を対象として在園時間中の身体活動量の調査と活動内容の観察を実施した。

調査では対象となる子どもに活動量計を装着し、在園時間中の歩数、歩行距離、消費カロリーを測定し、その後、比較検討のため分析をおこなった。その結果、2つの園においていずれも有意な差は認められなかった。

これらの結果は、B 保育園においてはテラス型園庭が従来の土の園庭の代替的な環境として十分に機能していることや、デイリープログラムの組み立てや活動内容が子どもの身体活動量に一定程度の影響を及ぼしていることを示唆している。

(2023年9月25日受稿)